

醉翁亭記

歐陽修

環滁皆山也。其西南諸峰、林壑尤美。望之蔚然而深秀者、琅琊也。山行六七里、漸聞水聲潺潺、而瀉出於兩峰之間者、釀泉也。峰回路轉、有亭翼然臨於泉上者、醉翁亭也。

滁を環（めぐ）りて皆山なり。其の西南の諸峰、林壑、尤も美しく、之を望むに蔚然（うつぜん）として深秀なる者は琅琊なり。山行くこと六七里、漸く水声の潺潺として、兩峰の間に瀉（そそ）ぎ出づるを聞く者は、釀泉（じょうせん）なり。峰回り、路転じて、亭の翼然として泉上に臨む者あるは、醉翁亭なり。

作亭者誰。山之僧曰智僊也。名之者誰。太守自謂也。太守與客來飲於此、飲少輒醉、而年又最高、故自號曰醉翁也。醉翁之意不在酒、在乎山水之間也。山水之樂、得之心而寓之酒也。

亭を作れる者は誰ぞ、山の僧智僊なり。之を名づくる者は誰ぞ、太守自ら謂ふなり。太守と客と、来たりて此に飲み、飲むこと少なくして、輒（すなわち）酔ひ、而も年又最も高く、故に自ら号して酔翁と曰ふなり。酔翁の意、酒に在らず、山水の間に在るなり。山水の楽しみは、之を心に得て之を酒に寓するなり。

若夫日出而林霏開、雲歸而巖穴暝、晦明變化者、山間之朝暮也。野芳發而幽香、佳木秀而繁陰、風霜高潔、水清而石出者、山間之四時也。朝而往、暮而歸、四時之景不同、而樂亦無窮也。

若し夫れ、日出でて林霏開き、雲歸りて、巖穴暝く、晦明変化（かいいいへんか）する者は、山間の朝暮なり。野芳発きて幽香あり、佳木秀いでて繁陰あり、風霜高潔にして、水清くして石出づる者は、山間の四時なり。朝（あした）にして往き、暮れしてに帰り、四時の景、同じからずして楽しみも亦た窮まり無きなり。

至於負者歌於途、行者休於樹、前者呼、後者應、僂僂提攜、往來而不絕者、滁人遊也。

負ふ者は、途（みち）に歌ひ、行く者は、樹に休らひ、前なる者は呼（さけ）び、後なる者は応（こた）へ、僂僂提攜（うるていけい）、往來して絶へざる者に至れるは、滁の人の遊べるなり。

臨溪而漁、溪深而魚肥、釀泉為酒、泉香而酒冽、山肴野蔌、雜然而前陳者、太守宴也。宴酣之樂、非絲非竹、射者中、弈者勝、觥籌交錯、起坐而誼譁者、眾賓歡也、蒼顏白髮、頽然乎其間者、太守醉也。

溪に臨みて漁（すなどり）すれば、溪深くして、魚肥え、泉を釀（かも）して、酒を為（つ）くれば、泉香んばしくして、酒は冽（きよ）し。山肴野蔌（さんこうやそく）、雜然として前に陳なる者は、太守の宴なり。宴酣（たけなわ）の樂しみは、糸に非ず、竹（ちく）に非らず。射る者の中（あた）り、弈（えき）する者勝てば、觥籌交錯（こうちゅうこうさく）し、起坐して誼譁する者は、衆賓の歡べるなり、蒼顏白髮、其の間に頽然たる者は、太守の醉へるなり。

已而夕陽在山、人影散亂、太守歸而賓客從也。樹林陰翳、鳴聲上下、遊人去而禽鳥樂也。然而禽鳥知山林之樂、而不知人之樂、人知從太守遊而樂、而不知太守之樂其樂也。醉能同其樂、醒能述以文者、太守也。太守謂誰。廬陵歐陽修也。

已にして、夕陽 山に在り、人影散亂するは太守歸りて賓客從ふなり。樹林陰翳し、鳴聲上下するは、遊人の去りて禽鳥 樂しむなり。然れども鳥は山林の樂しみを知りて、人の樂しみを知らざるなり。人は太守の遊びに従ひて樂しむを知りて、太守の其の樂しみを樂しむことを、知らざるなり。醉ひては能く其の樂しみを同じくし、醒めては能く述ぶるに文を以てする者は 太守なり。太守とは誰れをか謂ふ、廬陵の歐陽修なり。

吉州廬陵県（現在の江西省吉安市）の人。

一〇四五年（慶曆五年）安徽省 滁州の知事に左遷。